

幻覚の現象学素描

A Sketch of the Phenomenology of Hallucination

岡田 敬司
Keiji OKADA

目 次

- 1 はじめに
- 2 状況把握の真偽はなにによって決まるか
- 3 現象学的記述とは何か
- 4 頭痛の症状の始まりと変化
- 5 幻覚発生のメカニズムについて
- 6 エピソード抜粋
- 7 やられ感のリアルさについて
- 8 私の被害妄想の来歴
- 9 比叡平の怪文化
- 10 知覚と幻覚
- 11 おわりに

1 はじめに

本稿は本誌19号に掲載した「現象学的記述の可能性の基盤への問い—幻痛体験を手掛かりとして—」の続編である。前稿では幻痛体験を出発点にしつつも、目指すところは「真実把握としての現象学的記述の条件」の解明であった。今回の考察では、4年の経過の中での変化と発見を踏まえて、端緒の問い、つまり「このやられ感を伴う頭痛は現実なのか、それとも幻覚なのか」により直接的に迫ろうと思う。

まず、頭痛が幻覚であるとはいかなることかを明らかにしなければならない。痛みそのものは全き主観的体験であって、すべて真であり、偽の痛みというものはない。とすれば幻覚としての頭痛とは何を意味するか。結論から言えば、痛みの外部的原因が存在しない頭痛である。ではその場合の痛みの原因は何か。思念であり、表象である。つまり心の働きという内部的原因なのである。この点にはあとで何度か立ち戻ることになる。

外部的刺激がないのに、主体の思念が痛みを引き起こしてしまうことは実在する。我々はこれを幻痛と呼んだのである。この場合、思念が公共性を欠いた主体固有のものであることは珍しくないから、思念は妄想という言葉に通じるのである。そこでは幻

覚は容易に幻覚妄想という連合語と同じ意味になる。

私的思念が引き起こす感覚が幻覚だということになりそうだが、公共化された思念なら幻覚を引き起こさないといえるかどうかは決して自明ではない。自明であるように思えるのは、単にそのように定義したからにすぎない。共同幻想というものはいくらかでも存在するが、普通はそれを幻想と自覚せず、それゆえそれが引き起こす感覚も幻覚と呼ばないだけのことである。要するに、少数派の人はいやおうなく妄想性、幻覚性を自覚させられるが、多数派の人は自分たちの思念の妄想性を自覚せずに済んでしまうことが多いということだ。

さて、以下ではここ4年間に頻発した筆者の体験（やられ感を伴った頭痛）をエピソード的に記述していくが、その中で私的思念が妄想化しているのか、そうでないのかに注意を集中していきたい。前稿では取り上げなかった筆者の周りの社会力学的状況の記述が多くなってくるが、これが事実であろうと妄想の産物であろうと、どちらにせよ感覚の幻覚化に等しく力を発揮しているように思われる。主観的状況把握の中身が感覚の幻覚化に大きく作用するのである。この状況把握が正しいのか間違っているのか

を決するのは極めて困難である。普通、これが容易に決着しているように見えるのは、世間と呼ばれる社会的多数派の側の状況把握を真と呼び社会的少数派の側の状況把握を妄想と呼びならわしているからにすぎない。社会力学的な強弱や勝敗は状況定義の真偽とは別物だということである。

2 状況把握の真偽はなにによって決まるか

幻覚とは間違った状況把握の代表格であるが、その根本は共有化不可能な知覚体験であるところにある。共有化不可能な理由には大きく二種類のものがある。一つは感覚感度が主体間で大きく異なるために、外部刺激の有無の判断が違ってしまうため、もう一つは知覚残像を再活性化する（あるいはしない）思念内容が主体間で大きく異なるために、他者の思念が正しいとは思えないためである。要するに妄想と思ってしまうのである。

前者の場合、現実にある外部刺激が存在するのだが、それが微弱であるためにある主体には感知されるが、他の人々には感知されない。知覚過敏症でも呼ぶのが正確であろう。これは幻覚とは区別しなければならない。もう一つの可能性として、痛みの感知感度の特異性ではなく、どういった痛みであるかという知覚判断の特異性がある、そのために共体験不可能となる場合である。これは判断様式の特異性のゆえに妄想と呼ばれ、この妄想が知覚を幻覚化するとされるのである。狭義の精神異常とされるのはこの幻覚妄想、つまり妄想的に意味づけられた知覚体験である。

ここで不思議なのは、痛覚素材が客観的に存在すればOにとってもAにとってもBにとっても、いかなる痛みであるかの判断の食い違いはあっても「痛いものは痛い」という単純明快な体験共有があるはずなのだが、それが存在しないということである。Oに現前する痛みが、素材が客観的に実在するにもかかわらずAにもBにも現前しないのである。しかもAもBも微弱な痛覚刺激が実在するとは認めない。「誰かが微弱素材を発信しているから頭が痛い」等という被害判断こそ精神異常の証だといって、痛覚素材は存在しないと断定してしまうのである。自分（達）の感知しないものは実在しないという、よくある社会的事実、社会心理的事実である。この社会

心理的断定が数をたのんだ独断に過ぎないことは明らかであり、非論理的なのだが、これが真実であるかのように通用するのが世間である。私の共同生活者である妻はこのAやBの類の人間の典型である。私が痛みの体験を口にして共有化し、経験化しようとする直ちに拒否し、否定する。そんなものは存在しない。幻覚だというわけである。つまり世間では、自分たちが共感覚しないものは非在だとされているわけで、個性的な感覚体験、知覚体験などあってはならないとされていることになる。

感覚感度、知覚感度の個体差は明らかに存在する。計測機器で測定可能な聴力、視力などはそれを示している。ところで、私が考えたいのは、機器では測定困難な聴力や視力の個体差である。例えば、私によく聞こえる隣家の話声が、妻には全く聞こえない。聴力測定で私が勝っているわけでもないのに、少なくとも「質の悪い輩のちょっかいかけ」のたぐいは私に聞こえて妻には聞こえないのである。「狂っとる」とか「聞き耳を立てている」とかは一般的な会話にはめったに乗らない中身なのでさもありなんところだが、「岡田はん」という呼びかけが妻には全く聞こえないのに私には耳ざとく聞こえてしまう。（後でわかったことだが、私が闇に潜んで盗み聞きをしていると思ったので、これをたしなめてくれるらしい。）

このように、すべての声に鋭敏というわけではなく、ある想念（ここでは悪い輩のたぐらみ）の文脈に乗る言葉に取り分けて鋭敏なので、妻からは「幻聴よ」と一蹴されてしまうのである。それはそうなのだが、これがなぜ妻に聞こえないのか、不思議ではない。ちなみに録音しようとしたこともあったが、成功していない。言ってみれば知覚の文脈過敏性であり、知覚過敏がある文脈に沿って選択的に生じるのである。知覚過敏と幻覚をつなぐものとして、注目したい。

3 現象学的記述とは何か

「一切の客観主義的前提、科学的先入観をさておいて、意識に現れる事態をあるがままに記述せよ」。概略的にはこのようになるであろう現象学的記述は、いざ実行するとなるといくつかの困難に直面する。第19巻に掲載した論文で、妄想に惹起された幻

覚かもしれない「痛み」の記述について、その真相に至ろうとするならば、まず加害者と思しき者と被害者と思しき者の両当事者の間の加害、被害事実を確かめる議論が不可欠であることに思い至った。しかしその後4年になろうとするも、それが実行できていないのは、原理的な限界が見えてしまうためである。つまり、加害者とされる者が加害行為を認めても否認しても、どちらにしてもその証言が真実であるか否かは確認しようがないからである。もちろん、世間では裁判の場で利害の対立する当事者同士が議論を戦わせている。それによってこの真実性が明らかになったとされている。しかしその勝敗は決して真の決着ではないことが大半である。勝敗と正邪、真偽は一致しないのである。われわれが論考で追及しているのは、事実的な表向きの勝敗ではなく論理的ともいえるような真の真偽である以上、この議論を実行する勇気がなかなか湧いてこないのである。

では、討論や対話ではなく、内省と独白で現象学的記述が可能であろうか。結論から言えば、不可能ではないが不完全である。完全を求めるならば、先述の対話と議論を勇気をもって実行していくほかない。理由はハーバーマスのディスクルスの論理⁽¹⁾と同じである。

次に、幻覚妄想に思えたものが実は知覚過敏に起因する特異体験だったという仮説に立って、関連する意識体験を記述してみる。この意識体験のかなりの部分が「～と聞こえた」という体験であり、発話当事者の確認がなければ、言明行為の事実ではなく妄想知覚としての幻聴であるとされてしまう可能性がある。このことを承知したうえで、推測含みの体験記述である。

4 頭痛の症状の始まりと変化

前稿でOの症例として記述したように、K女子大に勤務しだした2013年4月から間もなく、研究室棟の各部屋の鉄扉のボタンボタンという開閉音が気になりだしたのが始まりである。気になるだけでなく頭痛になってきたのは2年くらいたってからと思う。この段階では外部音刺激が頭痛の原因と感じていたのだから、幻覚とする理由はなかったわけだが、

ボタンという音がして痛くなるという時間連鎖があって、それで因果関係をつかみ取るということがそれほどはっきりしていたわけではなかった。つまり、ボタンがなくとも痛む時があったのである。それは普通の病気としての頭痛ではないかといわれそうだが、MRI検査をはじめとしてよく調べてもらったが、身体病変は見つからなかった。

そんな時学生の一人在スマートフォンを操作して「モスキート音」を発信してくれたのである。この聞き取り不可能な高周波音の発信と頭痛とが同時だったので、以後頭痛が起るときは近辺で誰かが発信器を操作しているという確信が強くなってしまった。原因不明のランダムな痛みが耐え難いのは多くの動物実験が示しているところであり、案の定、私も神経のバランスを失ってしまったのである。発信器に原因を求めるのは苦し紛れの妄想かもしれないが、どんな理由でも理由がないよりはましなのである。

精神安定剤をいろいろ試したが、顕著な薬効はなかった。それでも頭痛の頻度は減ったし、何よりもパニックにならずに我慢できるようになったので、今日まで維持量を飲み続けている。

さて、10年近くたった今日でも本質的な変化はない。つまり誰かが発信器で攻撃を仕掛けてきている、という被害感に変わりはない。いや、むしろ強くなってきている。頭痛の頻度は小さくなってきたし、起こる場所も自宅に集中してきているのに被害感が強まるというのは一貫性がないようだが、加害者を隣家に入入りしている者に限定しだしたとすれば、つじつまはあっている。妄想は確信の度合いを深めているのだ。

厄介なのは、妄想が妄想であると証明できないことだ。実際、一般的にはありそうにないということと虚偽だということの間は驚くほど遠い。私の被害感が妄想か事実の反映かは容易には決定できないのである。

ながい間、私は自分が妄想に取りつかれているかもしれないと怯え、かつ混乱していた。これはこの頃では弱まっている。何より精神病性の妄想であるならば、抗精神病薬で軽減するはずではないか。様々な薬を試しても効果がないのは、この私の確信が事実の反映であることを示しているのではない

か。病膏育といわれればそれまでだが、この可能性に沿った形で以下に私のその後の状況把握を記述していく。なお、前稿の結論として述べた「私の体験」を「我々の経験」に転換する力量の弱さについては、記述をすること、論文を書くことを含めて折々に振り返りたい。

5 幻覚発生のメカニズムについて

原因のない痛みは存在しない。頭痛の場合であれば、何らかの刺激が原因となって頭痛が起こっているのであり、超音波刺激あるいは電磁波刺激が初発の原因である。それが記憶として知覚残像を生じさせ、これが何らかの要因で再活性化すれば、幻覚としての頭痛が起こることはある。しかしその場合でも、意識的あるいは無意識的な表象過程による知覚残像の活性化なしには幻覚はない。幻聴についても同様のことがいえよう。つまり、他者の外部的音声刺激が初発の原因であり、これがストレス性過剰の時、知覚残像を生じさせ、それが何らかの内部過程によって活性化すれば、外発刺激なしの内発刺激による幻聴となるのである。

この知覚残像の幻覚化のメカニズムの発見は、社会力学の結果と精神疾患症状とをつなぐものとして、私に救いとなった。というのも、長期にわたって私は幻覚か現実知覚かの二者択一を迫られて、それが決しがたいので股裂き状態に置かれていたのだが、この二者を連続的にとらえることにより、そこから解放されたのである。これはまた外因性精神疾患と内因性精神疾患とを連続的に理解する助けともなる。

精神症状は多くの場合、社会力学的に作られるのであり、知覚残像がいったん幻覚として自動化すれば、そこに精神疾患としての幻覚妄想体験が成立するのである。外部刺激がないのに妄想思念が知覚残像を再活性化してしまうのである。このような、ストーリーが知覚残像素材を構造化する類のメカニズムは、広く認められ、このプロセスをありのままに記述し、理解することが重要である。現象を理論的既製品である「精神病症状」と決めてかかる精神医学の似非科学主義を脱して、ありのままに記述すること。そうすると、かなりの症状が社会力学、社会的演技の結果として現れてくるのである。

私の聴覚過敏の傾向は若い時からあったが、今日のように頭痛を介してひどい苦痛となってきたのは12、3年前の京大病院脳外科での穿頭術の手術以降のように思う。この時は階段からの転落による外傷性の左右2つの硬膜下血腫の除去であったが、この後原因不明の頭痛に苦しむようになったのだ。おりしもスマートフォンが一般化した時期でもあり、電磁波による頭痛かという考えが起こったが、のちにスマートフォンによる超音波発信が原因かと思うようになった。どちらについても確認は取れていない。なお、除去手術後の病変がないことはMRI検査で何度も確認している。

精神疾患とか精神病とか呼ばれるものは普通、常人とは異なる知覚様式や思考様式の固着したもののうち、当該主体の生活遂行に妨げとなるものを指す。妨げとならない特異性は、あっても省かれるのである。知覚過敏はある意味で卓越性を示すものであるが、多くの場合、過ぎたるは及ばざるがごとの言葉通り、本人に苦痛を与える。特異な思考様式も時には卓越性のあかしであったり、逆に被害妄想と呼ばれるものの如く、社会生活を著しく困難にするものだったりする。ちなみに、ある程度の被害可能性の感知能力は用心深さとして正常に機能するが、ある閾値を超えると、対人不信の極度の高まりとして病的に働くのである。

本稿のテーマとの関連で興味深いのは、特異な思考様式のある種のもので、ある想念の想起によってある知覚残像を再活性化することである。想起が外部対象をリアルに知覚したと感じさせてしまうのである。幻覚である。ある種の想念が幻覚を惹起するのである。私の頭痛の場合であれば、「悪い輩がいて私を付け回して攻撃を仕掛けてくる」という想念が、どう考えても外部刺激が存在しない場でも頭痛を感じ、やられ感を感じさせてしまうのである。

6 エピソード抜粋

2022年10月15日の出来事。コンサートの帰り。妻と2人しか乗っていないバス内でやられ感を伴う頭痛があった。加害者なしの幻覚だと認めざるを得なかった。これがパニックを起こさなかったのは、経験的に外部刺激が内部刺激に転換することがあるとわかってきたからである。我を忘れて怒るのではな

く、「お、またやっているな。発信ご苦労さん」という感じで受けとめると、外部刺激の場合も内部刺激の場合も対応できる。怒って怒鳴ってしまうと、内部刺激の時は破綻するのである。私の何回かやった失敗である。

2023年5月4日。久しぶりにギリギリとくる頭痛あり。連休で隣家によからぬ輩が集まってきているらしい。しかし、この連中はどうして超音波発信が嫌がらせとして効果的であるとわかるのだろうか。少なくとも一人は私と同じように頭痛が起こるのだろうか。それとも、精神科医くずれで単に理論的に超音波効果を知っているだけなのか。そういえば、頭痛の前後、ということは発信の前後、「統失か」「間違いない」などと聞こえたが、統合失調症であるならば超音波で頭痛が起こるといっているのであろうか。

5月6日夕刻。別当町バス停で強い痛みあり。加害者は見当たらない。ということは、妄想から来た幻覚か。私のような宙づり人間には、このような両端の経験が極めて重要である。

5月26日。兄に電話で「体調はまずまず。7年越しの頭痛で、精神安定剤を飲んでいる。隣家から超音波で攻撃されている感じがあるためだ」と言明した。このコミュニケーション、この言語化が功を奏したか、ただの偶然か、攻撃は止まった。というか頭痛は止まった。兄との体験の部分的共有化は、頭痛の何割かが現実の攻撃によるもので、何割かが知覚残像による幻覚だという宙づり理解の確信を深めるものであった。

7月25日。ここ数日超音波攻撃の回数が増している。出所はすべて隣家と思われる。妻がこの話題の会話を拒否するので、私は被害体験を公共化できないでいたのだが、25日の陽だまりトレーニングの会で、大津さんと安倉さんに話した。高圧線の下での電波被害の話題が出ていたので、「私は電波でなく高周波音で頭痛が起こる」と聴覚過敏のことを話した。これは私の体験の公共化の貴重な契機であった。偶然かもしれないが、以後今26日14時に至るまで被害は止まっている。

8月2日14時20分。えぐるような頭痛。隣家からの攻撃か。

9月10日。深夜2時ごろ、例の頭痛で目覚める。隣家に入り込んでいる輩の超音波攻撃だ。奴らは「調査続行」と称して、この嫌がらせを果てしなく続けている。それにしても、超音波攻撃が有効だと知っている輩は何者か。患者か精神科医くずれか警察かくらいしか思いつかない。

10月10日。2週間ほど頭痛が止まっていたので、ほとんど幻覚妄想だったかと思いかけていたが、ズキンと一撃されて一挙に攻撃だと再確信した。ふしぎなことだが、常に「妄想だといいのに」と願っているのがこうなるのだ。この振り子現象には驚くほかない。このように自宅周辺で起こっていることを私的に理解できかけてきたのだが、実証や公共化には程遠い。なお、強い頭痛に襲われるのは、ギターを弾き始めた時が多かったが、この頃では風で戸がカタカタと鳴ったとき、更には無音の時でも「聞き耳を立てている」などと言いつつ攻撃発信するようになった。たまったものではない。

2024年1月5日19時20分。新年の攻撃初め。2.3分だが、しばらく鳴りを潜めていたので頭に堪える。敵は姿を隠しているし、卑怯者なので名乗り出るわけもない。こちらが痛がっていると味を占めるので、知らぬふりしかない。なんともはや。断続的にはあるが、かつては1時間以上の継続攻撃というのもあった。ライブの攻撃と幻覚化した攻撃が混じるので判断が難しい。

1月25日18時。電撃痛の後、しばらくして「無視よ」「反応なしか」「苦にしとへん」「躁鬱か」などと言った話声が聞こえた。

2月10日。朝から総攻撃。電撃痛が1日中続く。家でもバスでも月光堂でも。ネットにデマでも流れたか、それとも幻覚化が進んだか。

2月12日。電撃痛の直後、「話もできやしない」。どうやら私に聞かれてしまうのを嫌って、超音波攻撃で追い出そうとしているらしい。

4月2日。陽だまりトレーニング中にちょっかいが一回あった。

4月17日19時ごろ。ちょっかいと思しき攻撃あり。21時まで数回。

5月4日5時。朝寝中、ズキンときて目覚める。就寝中の攻撃は堪える。ミルグラムの古典的実験にあるように、人は権威の命令とあらば容易に拷問者に転じる。以前、同様の状況で「間違えば始末書を書けばよい」との話声あり。官僚化して墮落した警察なら、ありそうなことだと思えてしまう。本当に警察だったかそれともチンピラの芝居だったかは、定かではない。

7 やられ感のリアルさについて

精神医学的には、やられ感のリアルさの強さは病識のなさを示すものとして、否定的に理解される。病が重いというわけだ。しかし、病識とはいったいなになのか。病であってそれを自覚している、というのであればよいが、実際にやられているのでそれを感知したという場合ならどうであろうか。病識がないのは事態に適合しているではないか。この場合でも病識を持つというのは、単に病ではないかという観念に怯えているだけではないか。要するに、病識といえども過剰は異常である。過剰をよしとするのは、人を患者の役割に閉じ込めておこうとしているにすぎない。

とはいうものの、私のように非現実的な状況でも被害をリアルに感じてしまったことのある人間にとって、病識の問題は何とも厄介である。このやられ感のリアルさは正しいのか、間違いなのか。この決定ができないのである。しからば、健常者はどうなのか。おそらく病識の問題に出くわしたことはないだろう。つまりやられ感があれば即、やられたと判断して、何の迷いもないであろう。ただ、なんらかの状況把握の変化があれば、彼らは容易に先のやられ感のリアルさをカッコに入れる。そのリアルさを後生大事にするということはないのである。というか、リアルさが色あせていってくれるのである。私の場合であれば、事態の変化にもかかわらずリアルなやられ感が持続してしまう。これはおそらく感

覚入力の固定性ではなく、形相付与、文脈付与の固定性であろう。状況がいかにあれ、そこに悪意を持った他者が現れて何かを仕掛けてくる、という可能性が頭にこびりついているので、やられ感のリアルさが不変であり続けるのだ。つまり、私のような人間の場合、現実にはやられていようが想念の産物であろうが、どちらの状況でもリアルにやられ感を持ってしまうのである。病的であるかもしれないのは、感覚ではなく想念である。感覚素材が間違っているのではなく、形相である文脈付与が間違っているというか、固定しているのである。変化に対する融通が利かないのである。このようなわけで、幻覚の問題と思われたものの多くは、厳密には幻覚妄想の問題なのである。リアルさという幻覚ではなく、リアルさという幻覚妄想なのである。

8 私の被害妄想の来歴

次に、私の被害感の固定性がいかにして生じたかを考えてみる。私の生活歴の中で、度外れな悪意の他者との出会いが2度ばかりあったのを記憶している。一つは、母と死別して孤児となって間なしの幼児期のこと。村のいじめっ子というかがき大将にいびり倒されたのだが、その理不尽さは今思い出しても度外れであった。理由がないのである。幸いにも、この時は村の別のボス格がいて、自分のグループに入れてくれたから、心的外傷は最小限で済んだ。

もう一つは、大学1年生の時のこと。寮の自治会の渉外係をやっている、市内の女子大の寮の役員をやっている学生が相談に来たので、喫茶店でコーヒーを飲みながら話し合ったのだが、私の対応が特別に好意的だったと受け取られて、以後、何十年にわたって付きまとわれることとなった。今でいうストーカーである。この女学生の行動は常軌を逸していて、留守中に私の部屋に入り込んで私物を触るわ手紙を読むわ帰ってくれと言っても座り込んで居座るわ、のちに私の結婚後の自宅や職場に押しかけたり、無言電話を夜通し掛けたりしたのと十分に通じるものがあつた。のちに私は付きまとわれ感、監視されている感じによく取りつかれたが、そもそもの始まりはこのあたりにあつたのではないかと思っている。

K大教員を定年退職する2年くらい前のこと。ゼ

ミの討論が活気づいていた時、「盛り上がるとやないか」という爺さん声我突然に聞こえて、びっくりして辺りを見渡したことがあったが、現実か幻覚かいまだに判断がつかないでいる。どこかつながっている気がするのだ。

過去の経験がのちの行動を決定するという考えに百パーセント同意するわけではないが、経験のパターンともいべきものが記憶に定着し、のちの知覚や行為を意味づける文脈として作動するという事は十分にありそうだ。性格などと呼ばれるものは、そうしたものであろう。

9 比叡平の怪文化

隣家のFと私の確執の淵源として、1970年前後の京大闘争での互いの立場の違いがあったことを記しておこう。Fは当時の奥田総長の取り巻きで秩序派、私は熊野寮自治会役員の全共闘派であった。普段は何でもない過去だが、一つことがもつれだすともみえってくるのである。

そんなもつれの一つに、Fの息子の嫁が自宅で、つまり隣家で痴漢に襲われた事件がある。この犯人を私だとみなしていた節があるのだ。ふざけた話だが、この件のまたまた淵源に30年まえの別の痴漢騒ぎがあったことを思い起こすと、少し事態が見えてくる。当時から私は3丁目を含めて30分ばかりの早朝散歩を日課にしていたが、その3丁目で事件があったらしいのだ。ある朝から何回かチンピラの運転する乗用車に追尾されたのだが、それだけなのでなんのことかわからずじまいであった。何日か後、2丁目を散歩中、突然中年女が私の前に出てきて歩き出し、そして早足になってそばの民家に逃げ込んだのだ。どうやら私に追いかけられたので避難したということらしい。ばかばかしいが、これが比叡平の怪文化である。担っているのはチンピラからなるシャリバリ⁽²⁾治安部隊だ。これに私は痴漢容疑者として登録されていたらしい。同じ秩序派として、Fともつながりができていたのだろう。

私の性格にもなってしまった「付きまとわれ感」「監視されている感じ」は、大昔の出来事だけでなく、40歳で比叡平に越してきてから後にも形成の原因があったのである。

もう一つ、くだらないが息の長い嫌がらせとして、

風が吹いて戸がカタカタと鳴ると、私が嫌がらせでやっていると言い広めて「またやっとなる」などと相手になりに来る。こちらは向かいのAが大本だが、Fとシャリバリ隊が合流した。比叡平文化として、私の被監視感、付きまとわれ感の強化に寄与している。

10 知覚と幻覚

知覚が身体、特に行為主体としての全体身体との連携が強いことは、メルロ＝ポンティ⁽³⁾の示したところであるが、我々の考察では、幻覚は思念、記憶表象の全体性としての想念(妄想を含む)との連携が強いことが示された。知覚一身体に対して幻覚一想念である。

知覚は常態では「われ為し能う」に対応した世界把握であるが、幻覚は「われ思う」に対応した世界把握である。ここでは「われ思う」と「われ為し能う」とが内部世界と外部世界とに乖離してしまっているのである。

思念が世界からの触発に応じている限り、両者の乖離はないが、思念が世界からの呼びかけを感知しなくなり、事態の意味を「たどる」のではなく「発明する」に至れば、そこにあるのは原因なしの純粹生成としての幻覚である。それでもなお幻覚の構造説明が可能なのは、幻覚の思念的、記号的原因が存在するからである。情緒分析、象徴分析によって追究可能なのである。フロイトやラカン⁽⁴⁾の仕事をこのような角度から見ることができるであろう。

我々の差し迫った課題に戻ろう。「この頭痛は知覚過敏によるものなのか、それとも幻覚妄想によるものなのか。」両方のケースがある、というところまでは確認できたが、一つ一つの頭痛の識別は相変わらず困難である。被害感が根拠のある現実のものなのか、それとも過去の被害の記憶残像の固着したものが再活性化したのかは、その時点では識別不可能と言わざるを得ない。

ただそれでも手がないわけではない。被害を減じたり避けたりできない場合でも、ロプロ⁽⁵⁾の言うように、同時的な快の経験などで苦を中和してトラウマ化を避けることはできる。愛する他者、信頼する他者とのかわりはこの種の経験の代表格である。世界経験の真偽が、他者関係の信愛の存否に支えら

れているわけである。

11 おわりに

本稿と前稿を読み比べてみると、二番煎じの感が拭えない。方法的に内省と独白によったことの限界だろう。それでも一つ大きな進展があったと思えるのは、ストレスフルな体験を通して社会力学が幻覚妄想を産み出すプロセスを確認できたことである。これによって、私の頭痛は理由なしの苦痛から理由ありの苦痛に変わったのである。つまり、消滅しないものの耐えうる苦痛に転じたのである。

本研究が認識による世界把握の真实性を問う現象学の本道に一ミリでも貢献ができたと自負するのは、それが障害者による当事者研究の形をとったからである。真なる認識の主体の資格を疑われやすい障害者が、その偏見を跳ね返しうるか、できるとすれば、いかなる道を通ってか。本稿がこの問いに一歩でも応え得ておれば幸いである。

注

- (1) Jürgen Habermas (1929-) ドイツの社会思想家。『道徳意識とコミュニケーション行為』参照。
- (2) 中世フランスの村社会で風紀の維持を担っていた若者たちの実力行使のこと。声高に騒ぎ立てて違反者を威嚇した。
- (3) Maurice Merleau-Ponty (1908-1961) フランスの現象学者。『知覚の現象学』参照。
- (4) Jacques Lacan (1901-1981) フロイトの後継者を自認するフランスの精神分析家。
- (5) Michel Lobrot (1924-2019) フランスの教育学者、精神療法家。